

京都府立大学 京都地域未来創造センター 2023年度 事業報告書



Kyoto Institute for
Regional Prospects

KIRP

京都地域未来創造センター by 京都府立大学

京都府立大学の「知」を活かし、 地域の未来を共に創るための拠点です

これから地球と地域が直面する問題を考える際には、「展望する = 未来をデザインする」という発想が欠かせません。京都地域未来創造センター（**KIRP**^{カーブ}：Kyoto Institute for Regional Prospects）の「未来」は、future ではなく prospects です。

prospects は「前を (pro) 見る (spect) → 展望する」という意味があり、複数形にすることで、「可能性、将来性」、さらには「有望な人材」の意味もあります。

京都地域未来創造センターでは、本学の特徴である教職員と学生の顔の見える関係の中で培ったネットワークを活かし、地域の文化・歴史・伝統に基づく「こと」づくり、新しいテクノロジーや考えを活かした「もの」づくり、地域の生物資源などの特性評価や分析に基づく「価値」づくり、さらには公共政策と連動した新しい「社会システム」づくり、地域の課題解決を担う「ひと」づくりに至るまで、京都府の公立大学の地域連携の総合窓口として、未来を多面的に展望して、持続可能な地域づくりに貢献します。

Kyoto Institute for
Regional Prospects

KIRP

京都地域未来創造センター by 京都府立大学

目次

はじめに

1. KIRP について p.2

- ▶ センターからのメッセージ
- ▶ 2023年度 調査研究の実施地域一覧

2. KIRP の調査研究 p.8

- ▶ ACTR ①
- ▶ ACTR ②
- ▶ 受託研究

3. 京都府立大学の地域貢献 p.12

- ▶ プロジェクトに関わるステークホルダーの声を紹介
- ▶ 府内各地での府大 ACTR 成果報告会

4. 人材育成 p.18

- ▶ まちづくり人材育成プログラム
- ▶ 市町村からの研修生受け入れ
- ▶ 国際交流協定

5. 組織体制 p.24

- ▶ 京都地域未来創造センター概要



1. KIRPについて

▶センターからのメッセージ

2023年度 メッセージ

2023年度は2019年度に国際交流協定を締結した、米国ポートランド州立大学公共サービス実践センター（Center for Public Service: CPS）が主催する「まちづくり人材育成プログラム（通称：JaLoGoMa）」が20周年を迎えられたことを祝い、現地を訪問させて頂きました。CPSは当センターと同様に、大学と地域をつなぐ橋渡し役として、「地域貢献」という共通の使命をもつセンターで、いつも私たちに知的刺激を与えてくれる良きパートナーです。大学の地域貢献と言えば一般に、地元企業との共同研究やスタートアップ創業の推進など、研究成果に基づいた事業への関心が高い。しかし、教育による地域貢献についても、もっと着目されるべきではないでしょうか。大学の教育は「議論を通して、真理を探究する」というアカデミア本来の営みであり、決して特別なことをするわけではありません。まちづくりの一线でもがいている人たちが自身の活動の意義や課題を探求し、地域社会の変化を理解すると力強く成長していく。私はCPSが20年にわたり提供してきた「まちづくり人材育成プログラム」に参加する人たちから、そのような姿を数多く見てきました。当センターが地域課題の解決に資する“人づくり”として始めた「場づくりLabo」は、そうしたCPSの取組みに学び生まれたものです。社会経験を積んだ人たちだからこそ、大学での真理の探究は教育効果を発揮する。仮説・実証を繰り返す知的訓練は、まちづくりにおいても有用なのです。

2023年度は、当センターの地域貢献活動を「見える化」する新たな試みにも挑戦いたしました。

1つ目は、従来、本学の下鴨キャンパスに隣接する京都学・歴史館でのみ行ってきた「地域貢献型特別研究（ACTR）^{アクター}」の成果を発信するパネル展示を、2023年度は本学が近年開設したサテライトオフィスのある「舞鶴赤れんがパーク」や「前尾記念クロスワークセンター MIYAZU」、精華キャンパスのある精華町役場内においても開催させて頂いたことです。

2つ目は、ACTRの発信をその成果のみならず、本学教員の研究グループが府内地域で調査を行っているその様子を動画撮影し、その研究プロセスについても、当センター公式SNSを通じてリアルタイムで、また編集したコンテンツをセンターのウェブサイトで発信したことです。新たな情報発信の方法やコンテンツの充実を図ることによって、これまであまりアクセス頂けなかった皆様にも情報を積極的にお届けして、今後も当センターの関係人口の拡大・ネットワーク化に努めて参りたいと思います。

本事業報告書では、このような事業以外にも様々な活動の成果を取りまとめしておりますので、ぜひご覧いただければ幸いです。どうぞ、よろしくお願ひ申し上げます。



2023年度 センター長
川勝 健志〔教授 公共政策学部〕

2023年度は、コロナウイルス感染症による社会的な行動制限は解消され、これまでの日常が戻ってきた年でした。京都地域未来創造センター（KIRP）^{キープ}でも、制限を受けることなく様々な活動を対面でも推進することができました。

一方で、コロナを機に社会に広くオンライン化が進み、これまでに以上にデジタル媒体での情報収集や発信が重要性を増してきました。KIRPでも、より多くのステークホルダーの皆様にご覧いただけるよう、ホームページの充実を図りました。

また、個別の研究成果に関しても、ドローン映像なども取り入れながら、皆様により理解を深めていただけるような発信に努めてまいりました。今後もさらに地域の皆様のお役に立つ貢献を続けるとともに積極的な成果の発信を行って参りたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。



2023年度 副センター長
宮藤 久士〔教授 生命環境科学研究科〕

2024年度 メッセージ

センター長

岩崎 雅史 (准教授 生命環境科学研究科)



主なプロフィール
はこちら▼



私が地域研究に初めて挑戦させていただいたのは2018年春のこと。ACTRの応募に際して、社会科学の門外漢である私などが手を挙げると迷惑では？と随分葛藤した記憶が今でも鮮明に思い出されます。そのような勇気を振り絞っての一步から早や6年。歴代のKIRPメンバーをはじめ、市町村職員の方々や地域の皆様からは数え切れないほどの心温まるご支援をいただき、思いがけず9件もの地域研究に関わらせていただきました。

打ち寄せる波が海岸線を変化させるが如く、世界的な変革が地域にまで多様な変容をもたらす現代社会。そのような中で、これまで以上にKIRPに求められるのは、地域課題がもつ多様性の1つ1つに対して柔軟かつ誠実に向き合う姿勢です。地域における学術成果の社会実装は全国的な重点課題の1つでもあるため、学術面においてもKIRPが果たすべき役割は今後大きくなると感じています。個人の立場ではひき続き地域課題に挑むフィールドプレイヤーとして、センター長の立場では地域と大学の架け橋となって双方の発展を下支えするマネージャーとして努めて参ります。

副センター長

上杉 和央 (准教授 文学部)



主なプロフィール
はこちら▼



今年度、京都府立大学は学部体制が大きく変わり、新しい姿「シン・府立大」(!)となりました。時を同じくして、KIRPでも岩崎センター長の就任をはじめ、メンバー交代に伴う変化がありました。「シン・府立大」において、「シン・KIRP」はどのような役割を担っていくことができるのでしょうか。公立大学において、地域貢献は重要な位置を占めることは間違いありません。そうであれば、考えるべきはどのような地域貢献が府立大らしく、またKIRPらしいのか、といった点なのでしょう。社会の変化とともにこうした点は刻々と変化していくものであり、従来の形で満足する姿勢ではダメかもしれません。これまでの活動の核「心」を忘れずに、革「新」的な気持ちも持ちつつ、「シン・KIRP」の運営に参加したいと思います。

企画調整マネージャー

岩松 義秀 (客員准教授 公共政策学部)



主なプロフィール
はこちら▼



私たちを取り巻く社会経済情勢は、少子高齢化・人口減少をはじめ、未曾有の災害、新型コロナウイルス、国際的な紛争など、先を見通すことが難しい状況にあります。そのような中で、地域は重要な役割を担っていると考えますが、地域が持つ課題も多種多様にあり、これらを解決していく必要があります。その一つとして、大学における研究の成果を地域に還元することによって、地域課題を紐解いていくことができないか、また、大学と地域が連携し、創発を行うことによって、地域にイノベーションを起し、地域経済の発展に繋げることができればと考えています。新体制においては、研究分野や専門領域の異なる研究者、コーディネーター、研究員が、英知を絞り、例えば異なる研究を組み合わせるような学際的な視点を持って、大学と地域が連携・創発することによって、地域のイノベーションを導いていきたいと考えています。

▶ 2023 年度 調査研究の実施地域一覧

2023 年度は、「府大 ACTR」研究①～⑰を 17 市町村、受託研究①、②を 2 市町で実施。



受託研究

研究課題

- ①自治会カルテ更新のためのアンケート内容の設計とアンケート結果の活用について
- ②空き家流通・利活用促進施策の研究

※研究課題が京都府内広範囲にわたるもの

⑧/⑨/⑪/⑫/⑬/⑮/⑯

京都府立大学 地域貢献型特別研究（府大 ACTR*）採用決定一覧

*次頁にて解説。

研究課題	代表者	主な活動地域
①戦争の記憶の記録化と次世代への継承の仕組み構築	上杉 和央〔准教授 文学部〕	京丹後市・舞鶴市・南丹市・亀岡市
②無病長寿の霊果といわれるムベの食品機能性成分の同定と作用機構の解明	中村 考志〔教授 文学部〕	福知山市
③京都府北部の MALUI・ ^{マルイ} 高大連携による文化資源を生かした地域づくり	東 昇〔教授 文学部〕	舞鶴市・福知山市・京丹後市・宮津市
④地域・学校・博物館との連携にもとづく文化遺産の次世代に向けた活用研究	菱田 哲郎〔教授 文学部〕	福知山市・京丹後市
⑤文化庁 MALUI 連携による綾部市 ^{きみのおさん} 君尾山歴史ふるさと活性化事業 —「国宝二王門と巨樹の森」の魅力発信と次世代継承—	横内 裕人〔教授 文学部〕	綾部市
⑥京都市南部近郊都市（宇治市・長岡京市）における空家のデータサイエンス分析と今後の発生予防と利活用方策	駒寄 忠大〔准教授 公共政策学部〕	宇治市・長岡京市
⑦学研都市のまちづくりと住民参加の理念と実際	駒寄 忠大〔准教授 公共政策学部〕	精華町
⑧スマート農業を利用した鳥獣害軽減方法の確立と果樹栽培高度化技術開発	板井 章浩〔教授 生命環境科学研究科〕	京丹後市・精華町
⑨京都在来ブドウ品種「聚楽」の復活栽培に向けた技術開発と新たな利用方法の開発	板井 章浩〔教授 生命環境科学研究科〕	京都府域
⑩京丹後の海の魅力あるブランディングに向けた海水浴場の調査・分析およびデジタルアーカイブ化	岩崎 雅史〔准教授 生命環境科学研究科〕	京丹後市
⑪京都府宇治の抹茶製造工程で廃棄される茎から得られる抗菌物質の活用法	岡 真優子〔准教授 生命環境科学研究科〕	京都府域
⑫地域森林資源の搬出と流通の促進に向けた林業 DX（デジタルトランスフォーメーション）京都モデルの構築	神代 圭輔〔准教授 生命環境科学研究科〕	京都府域
⑬昆虫の養殖飼料化を基盤とする新たな養鶏システムの確立 —京都府基幹産業が抱える課題の包括的解決に向けた取り組み—	田中 俊一〔准教授 生命環境科学研究科〕	京都府域
⑭大江山連峰の地質と地形を生かした自然循環農業の町づくり	中尾 淳〔准教授 生命環境科学研究科〕	与謝野町
⑮北山杉・京銘竹等の京木竹材の標準化（規格化） —伝統工芸技術継承を含めた科学によるトップブランド化—	古田 裕三〔教授 生命環境科学研究科〕	京都府域
⑯京都府産宇治茶の安定生産に貢献する生育予測研究	森田 重人〔准教授 生命環境科学研究科〕	宇治市
⑰京都府希少農作物が持つ有用成分を生かしたブランド化推進と商品開発	森本 拓也〔講師 生命環境科学研究科〕	城陽市・亀岡市・舞鶴市

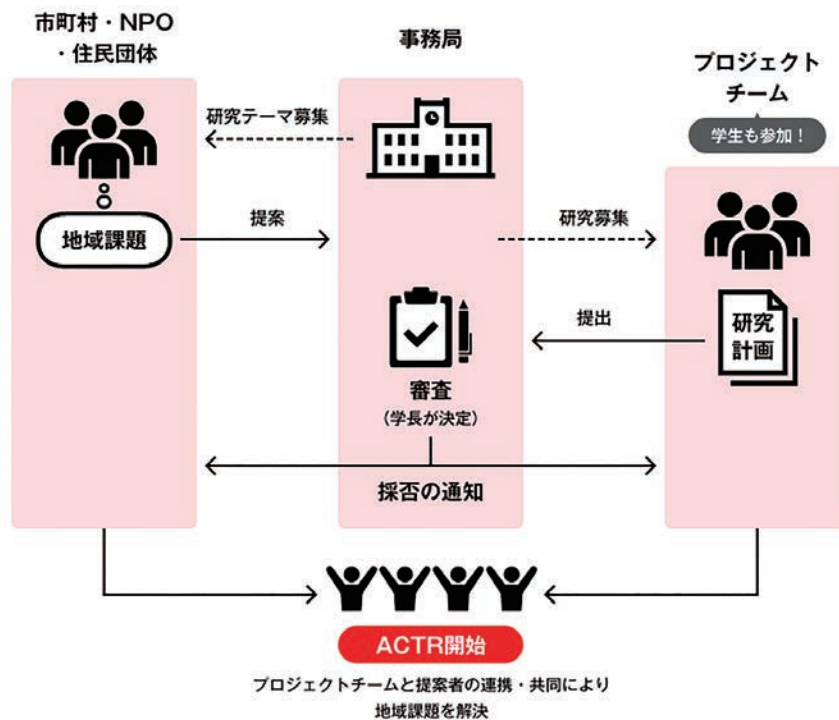
府大 ACTR とは？

ACTRは、Academic Contribution To Region の略で、「地域に貢献する学術研究」を意味します。京都府内の市町村、府内に立地する企業、NPO 等から寄せられた地域課題の提案に基づき、本学教員とマッチングが成立した研究に対して、学内外の審査委員による審査会を経て決定しています。

本学では、京都府内の地域振興や産業・文化の発展等に貢献することを目的として、2004 年度から、本学の教員を中心とする研究プロジェクトチームが、地域課題の解決に取り組む地域貢献型特別研究（府大 ACTR）の取り組みを行っています。

2023 年度は、府内各地の自治体や NPO 等から 53 件の提案があり、外部の審査委員も交えた審査の結果、17 件の研究計画が採択されました。1 件あたりの予算規模は、約 70 万円～200 万円です。

毎年、提案があった地域で成果報告会を開催するほか、府内各地で研究成果のパネル展示を行い、研究成果の発信、共有も行っています。これまでの研究成果は、京都地域未来創造センターのウェブサイトで検索できます。



2. KIRPの調査研究

▶ 府大 ACTR ①

京丹後の海の魅力あるブランディングに向けた 海水浴場の調査・分析およびデジタルアーカイブ化

地域：京丹後市

海水浴場×データサイエンス×ブランディング

● 研究の概要

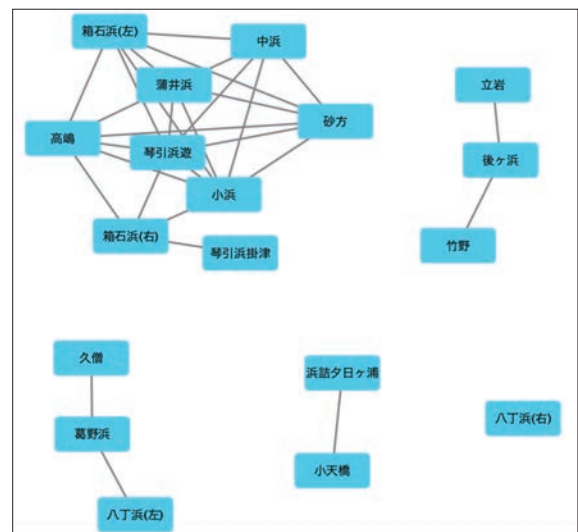
京都府北部の丹後半島には美しい海岸が連なり海水浴場が点在していますが、その魅力はあまり知られていません。そこで、それぞれの海水浴場の特色を明らかにするために、現地での調査を通じてデータを収集し、それらの分析を行いました。

● 研究の内容

- 海水浴場の現地調査によるデータ収集
- 海底3Dマップ作用法の確立
- 海水浴場間の類似度評価法の確立
- 海水浴場ごとの特色が分かるPR動画の制作

● 研究体制

- 研究者：岩崎 雅史 [准教授 生命環境科学研究科]
- 新庄 雅斗 [講師 大阪成蹊大学データサイエンス] ほか
- 研究協力者：武内 奎太 [M2 生命環境科学研究科]
- 京丹後市役所・京丹後市観光公社・海の京都 DMO ほか



▲海水浴場の水深変化の特徴に基づくクラスタリング

● 成果物



▲（箱石浜海水浴場）『箱のような岩々に囲まれた魚たちのすみかに潜入♪泳力に応じたシュノーケリングスポットが選べます！』



▲（久僧海水浴場）『シュノーケリングの超穴場！魚影の濃さは京丹後海水浴場でNo.1かも!? たくさんの魚たちに出会えます♪』



▲（立岩海水浴場）『ここは太平洋!? 深さは京丹後海水浴場で後ヶ浜海水浴場と並んでNo.1! 立岩の雄大さを海中から味わうことができます♪』



▲（中浜海水浴場）『夏シーズンとはひと味違う晩秋の静けさもたまらない! 海中の色合いや目にする魚たちも少し異なります♪』

学研都市のまちづくりと住民参加の理念と実際

総合計画×住民参加×効果検証

● 研究の概要

精華町では、1987年に関西文化学術研究都市建設促進法が施行されて以来、学研都市のまちづくりを進めており、その際に住民の意見は欠かすことができないものです。しかし、住民参加の法制度は、自治体任せの部分が多く、各自自治体にとっては、組織や体制の整備、人材育成などの負担も大きく、「形式的な」住民参加に留まっているとの批判も散見されます。

そこで、自治体の政策形成過程における住民参加の今日的意義を明らかにしたうえで、住民参加を「実質化」させるために必要な事項と評価指標を検討し、精華町における住民参加の在り方について展望することを目的として調査研究を行いました。

● 研究の内容

- ・文献調査（先行研究）
- ・計画策定に関わった住民83名を対象にしたアンケート調査
- ・他地域ヒアリング調査（愛知県長久手市）

● 研究体制

研究者：前川 由衣〔研修生（精華町派遣）〕 川勝 健志〔教授 公共政策学部〕

研究協力者：精華町役場ほか



研究の目的

住民参加を「実質化」させるために必要な事項と評価指標を検討し、精華町における住民参加の在り方について展望する

住民参加の効果検証の枠組み

評価指標
として設定



- ① 情報提供
- ② 参加機会
- ③ 意見反映



▲調査研究報告会（3月27日 於：精華町役場）
対象：精華町長、管理職職員および議員

川勝センター長による解説に続き、本研究の内容を報告。たくさん質問とコメントをいただき、有意義な報告会となりました。

▲成果報告会のスライドから抜粋

自治会データサイエンスカルテ更新に向けて

自治会×データサイエンス×住民協働

● 研究の概要

自治会ごとの状況（経年変化を含む）を把握するためのDS（データサイエンス）カルテを作成するためには、アンケートなどを通じてデータを収集する必要があります。

2023年度は、町役場において継続的に自治会DSカルテを更新できるような仕組みについて検討しました。

● 研究の内容

2021年度の町内住民1000人を対象にしたアンケート調査と2022年度の自治会に対するヒアリング調査（町内の全38自治会のうち32自治会でヒアリング、4自治会で書面調査を実施）の結果、および、2022年度に作成した自治会DSカルテをもとに、町役場の職員が継続的に更新できるような仕組みを設計。カルテへ掲載可能な内容と、それらを掲載するために必要となるデータ収集およびデータ分析について整理しました。

● 研究体制

岩崎 雅史〔准教授 生命環境科学研究科〕

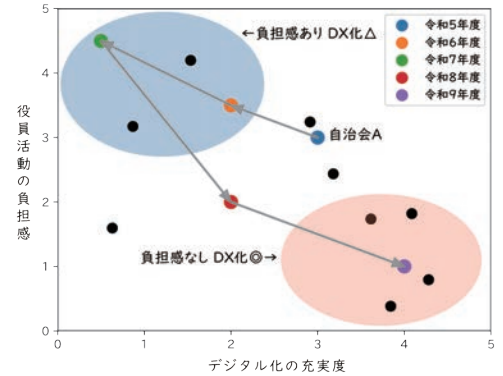
青山 公三〔本学名誉教授〕

大学院生（武内 奎太〔M2 生命環境科学研究科〕

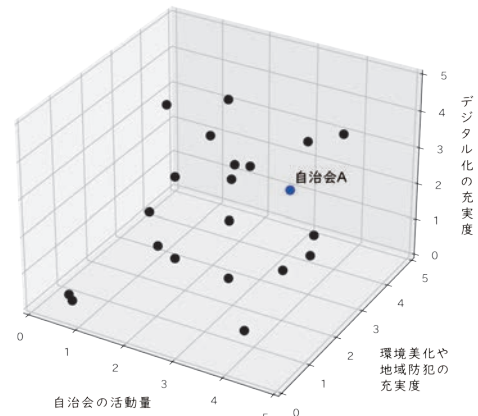
百々 健人〔M1 生命環境科学研究科〕ほか

京都地域未来創造センターメンバー

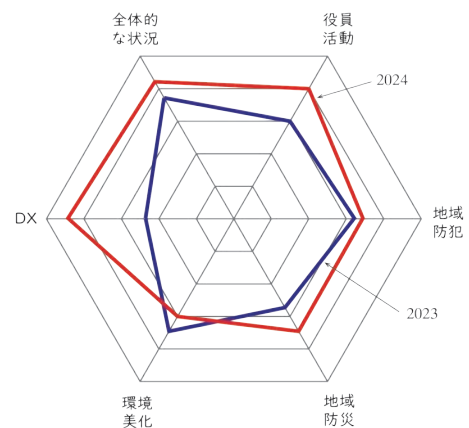
研究協力者：久御山町役場



▲自治会の状態の経年変化グラフ



▲主成分分析に基づく自治会間の類似度分析



▲自治会の総合的な状態を表すレーダーチャート



3. 京都府立大学の地域貢献

▶プロジェクトに関わるステークホルダーの声を紹介

地域森林資源の搬出と流通の促進に向けた 林業 DX* 京都モデルの構築

*DX : Digital Transformation デジタルトランス
フォーメーションの略

“ ICT活用で京都府産の木材の流通量を増やし、京都府内の林業や
木材加工関連産業を活性化し、地域社会の持続可能性に貢献する “

● 研究の概要

京都府は全国 12 位の森林率

京都府の森林率は、74.2%（2023 年度）。都道府県別で 12 位（全国平均 66.4%）と高く、森林資源に恵まれた地域です。現在、多くの人工林が利用期を迎えています。京都府内で必要とされる木材の需要量（約 49 万 m³/年）の 4 割程度しか供給できていません。その背景には、林業の停滞、担い手の不足、放置森林の増加などの問題が発生しています。

林業や木材生産の現場の悩み

これまで、林業現場・木材生産現場では、丸太の本数、直径、量（材積）について、計測から記録、集計、伝票作成まですべて人手によって実施されており、情報通信技術（ICT）の活用などによる作業の効率化が課題でした。

● 研究の内容

本学研究者、京都府農林水産部、農林水産技術センター、京都府内の教育機関による、木材生産者から木材加工者までのサプライチェーン全体で木材流通を促進するための京都モデルを構築するプロジェクトです。具体的には、1)～3)の内容で進んでいます。

1) ICT を活用した架線集材可能地域の抽出と効率的な集材計画の作成

森林の範囲を面的に抽出する手法を開発し、森林資源量データをもとに、収穫材料量を把握

2) ICT を活用した原木情報（材積、強度性能等）の見える化による需給体制の構築

“木材流通”京都モデルの中心的役割を担う木材市場・木材加工業者などの 16 事業者を対象にした意向調査を行い、京都モデル構築に向けた現状の分析や課題を抽出

3) 教育機関と連携した林業 DX 人材の育成

京都府内の教育機関（京都府立林業大学校や京都府立北桑田高校京都フォレスト科）と連携して、前年度に独自開発したアプリを使った連携講義等を実施、林業 DX 人材を育成

● 研究の成果

- これまでの人手に頼る検寸作業や紙による集計、手作業によるデータ化を、前年度に独自開発した「木材検収・強度推定アプリ」によって、自動解析・集計・出力できるようになり効率アップ
- 2024 年 5 月からは、「京都府版木材検収アプリ」を利用した実際の木材取引が開始
- 京都府の政策（農林水産部林業振興課 京の木流通モデル構築支援事業「川上と川下をつなぐ新たなサプライチェーンの構築」事業）と関連させつつ具体化を進め、アプリの現場導入を図る

● 研究チーム

京都府立大学：神代 圭輔〔准教授 生命環境科学研究科〕、古田 裕三〔教授 生命環境科学研究科〕、
長島 啓子〔教授 生命環境科学研究科〕

三重大学：瀧上 佑樹さん

京都府農林水産部：塚脇 健さん、明石 浩和さん

京都府立林業大学校：足立 亘さん

京都府農林水産技術センター：菊谷 茂さん（2022 年度）、川勝 隆之さん（2023 年度）、村山 浩久さん

北桑田高校：細尾 勝さん

研究メンバーへのインタビュー

村山 浩久さん（主任研究員 京都府農林水産技術センター 森林技術センター）

林業（行政）職員として、様々な経験は積んできましたが、研究員として、研究分野に初めて従事した中、どのように進めたらよいものかというタイミングで神代先生と出会いました。木材の研究分野の専門性を深める上で、大学の研究者の皆様と一緒に研究に取り組めるというのは心強いです。

地域課題解決や地域貢献も大学の重要な役割と位置付けて頂いている府立大は、研究を進める上で無くてはならない存在であると考えています。

学会での発表から、自治体同士のネットワーク構築へ

DX化は、全国共通の課題であり、どこもやりたいとは思っているのですが、ゼロから立ち上げるのは大変であります。ACTRを通じて、神代先生に助走していただいたことで、京都府の取組は先行事例としても注目してもらえるようになりました。大学の先生方のご助言のもと、研究成果を学会で発表するようになり、全体の中で京都府が今取り組んでいることの立ち位置が見えるようになりました。学会でのポスターセッションでは他の自治体からの反応が返ってくるので、情報交換もでき、自治体同士の横のつながりも更に深めることができています。

人材育成

林業に関わる京都府の教育機関には、京都府立大学、京都大学、京都府立林業大学校、京都府立北桑田高等学校があり、数は多くはないのですが、それぞれ業務がある中で、なかなか声をかけづらく、横の連携をどう深めていくか課題でありました。ACTRの枠組みのおかげで、京都府立大学や京都府立林業大学校、そして、私の出身校である北桑田高校京都フォレスト科にも声をかけることができました。教育機関との人的なネットワークの形成にも役立っています。

南 靖弘さん（担当課長 京都府森林組合連合会 京都木材流通センター）

「京都府森林組合連合会」の紹介

京都府内にある20の森林組合を会員とする協同組織。綾部市には京都木材加工センターと木材流通センターがあり、それぞれ、京都府産材の原木を使用し木製加工品の製造及び販売・施工をしたり、原木の買取・販売をしています。

サプライチェーン全体で取り組むきっかけに

木材の流れは山から住まいまでに至る長いサプライチェーンです。木材流通は単一にみえても、川で例えるならば、川上と川中、川下と業態が違っており、それぞれの主張が異なります。各業態の実際として、川上（林業生産者）から川下（建築業者等）が面的に集まる場面がほぼなく、両者共に川中（木材加工業・仲買等）を通じて関係性を持たれています。サプライチェーンの課題として、川上から川下の木材の需給情報の共有（原木規格・供給量・プライス等）が進まず、木材流通の効率化につながらない現状があります。それが、今回のICTの取り組みにより、課題に正面から向き合いやすくなりました。サプライチェーン全体での木材流通は、すぐには完結しない課題なのですが、持続して取り組んでいかななくてはならないというメンバー共通の目的を持って進めています。

外部からの目線を意識するように

林業という産業はどのような産業であり、どんなことに取り組んでいるのか… 2024年度から、「森林環境税」という課税徴収される仕組みがスタートし、税金の使い道として一般の皆様からの林業に対する関心が高まりつつあります。一般の皆様からの目線で「林業をもっと知ってもらおう」ことを意識するようになりましたし、また、この木材業界を通じて広くアピールすることが大切であると思います。



左：南 靖弘さん（担当課長 京都府森林組合連合会 京都木材流通センター）
右：村山 浩久さん（主任研究員 京都府農林水産技術センター 森林技術センター）

現場の方との関係づくり

地域や諸団体といった現場の方との関係づくりは、研究をはじめた当初から意識をしていました。おふたりは現場のことをよくご存知なので、現場から出てくる声をどうやって解決しようかと相談しながら一緒にやっています。面白いのは3人で一緒に先進事例調査に行くと、3人とも視点が全然違うんですよ。同じところを見ても発言が全然違います。それを聞きながら、おふたりから勉強させてもらっていますし、「なるほど」と思うことも多いです。

一緒に取り組むプロセスの重要性

研究者目線ではなくて、現場の声も聞きながら折り合いが見つかる場所を探していくと、だんだんと「うちでも技術を使えないか」という雰囲気になってきます。一気にすべてを解決するのではなく、突破口を探していると、徐々に広がりが見えてきます。このようなプロセスにこそ価値があると思っています。地域の現場と研究者とのコミュニケーションは、ACTR 研究のとても良い点だと思います。

学生教育

ここ（京都府森林組合連合会木材流通センター綾部ストックヤード）に実際にたくさんの学生を連れてきたことありますが、現場で見聞きすると教育効果が絶大だと思っています。例えば、学生に「日本の森は大変なんですよ」ということを言ってもあまり実感として湧かないですが、「ここに並んでいる丸太一本いくらだと思いますか？」と聞きます。その答えを、「3～4千円」と伝えると、「驚がく」します。森林が大好きな学生も多いので、50年もの時間をかけて育ててわざわざ山から伐り出してきて、そこに並べた丸太の値段が、なぜ、そんなに安いのかと怒り出すんですよ。

大学の専門教育では、森林だけ、流通だけ、木材だけと専門分野に分かれてしまう傾向にあるのですが、現場に行くと全部関係していて、一気通貫で課題を解決する必要があるということを理解できます。学生を ACTR で現場に連れて行く最大のメリットですね。



左：村山 浩久さん〔主任研究員 京都府農林水産技術センター 森林技術センター〕
中央：神代 圭輔〔准教授 生命環境科学研究科〕
右：南 靖弘さん〔担当課長 京都府森林組合連合会 京都木材流通センター〕
於：京都府森林組合連合会京都木材加工センター・木材流通センター綾部ストックヤード

▶ 府内各地での府大 ACTR 成果報告会

① 「戦争の記憶の記録化と次世代への継承の仕組み構築」

研究代表者：上杉 和央〔准教授 文学部〕

「平和講演会」長岡京市立長岡第四中学校（参加者）約 140 名

② 「京都府北部の MALUI*連携による文化資源を活かした地域づくり」

研究代表者：東 昇〔教授 文学部〕

「古写真からみる近代の舞鶴」京都府立東舞鶴高校（参加者 48 名（計 2 回））

「古文書調査体験講座」京都府立福知山高校（参加者 18 名）

「文化庁地域連携交流会」舞鶴西公民館（参加者 15 名）

* MALUI とは？ M（博物館）、A（文書館）、L（図書館）、U（大学）、I（企業）

③ 「地域資源としての湯舟坂 2 号墳Ⅲ — 湯船坂 2 号墳の被葬者像を探る —」

研究代表者：諫早 直人〔准教授 文学部〕

「湯船坂 2 号墳の被葬者像を探る」京丹后市久美浜庁舎（参加者 約 80 名）

④ 「文化庁 MALUI 連携による綾部市君尾山歴史ふるさと活性化事業 — 「国宝二王門と巨樹の森」の魅力発信と次世代継承 —」

研究代表者：横内 裕人〔教授 文学部〕

「綾部市学研社会科中学部研究会」

光明寺・上林一貫校（参加者：社会科教員 9 名）

「高齢者学級」

光明寺（参加者：20 名）

「上林小中一貫校 PTA 主催ふるさと講演会」

上林一貫校（参加者：約 30 名）

「奥上林公民館大会」

奥上林公民館（参加者：約 40 名）

⑤ 「京都府宇治の抹茶製造工程で廃棄される茎から得られる抗菌物質の活用方法」

研究代表者：岡 真優子〔准教授 生命環境科学研究科〕

「令和 5 年度茶業研究所研究報告会」宇治茶会館（参加者約 200 名）

⑥ 「大江山連峰の地質と地形を生かした自然循環農業の町づくり」

研究代表者：中尾 淳〔准教授 生命環境科学研究科〕

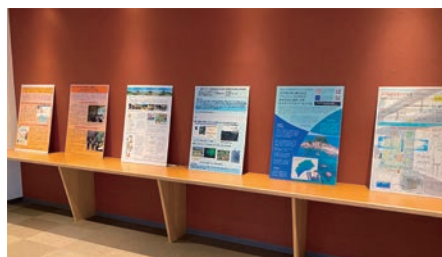
報告会：総合地球環境学研究所

府大 ACTR パネル展示（舞鶴市・宮津市・精華町ほか）



◀ 京都府立京都学・
歴史館（京都市左京区）

日時：9月1日～
9月30日
入場者数：380名



◀ 前尾記念クロスワーク
センター MIYAZU（宮
津市）

日時：11月7日～
12月8日



◀ 京都府立大学 まいづる赤れんが
オフィス（舞鶴市）（舞鶴赤れん
がパーク コワーキングスペース）

日時：10月5日～
11月6日



◀ 精華町役場 2階正面
玄関ロビー（精華町）

日時：3月21日～
3月27日

パネル展示をご希望の場合はセンターまでご連絡ください。

京都府立大学精華キャンパス（精華町）

日時：2024年3月10日

場所：精華キャンパス・附属農場（精華町） 参加者：約25名

テーマ（4件）：

「スマート農業を利用した鳥獣害軽減方法の確立と果樹栽培の高度化技術開発」（京丹後市・精華町）

「京都在来ブドウ品種“聚楽”の復活栽培に向けた技術開発と新たな利用方法の開発」（京都府内全域）

「京都府産宇治茶の安定生産に貢献する生育予測研究」（宇治市）

「京都府希少農産物が持つ有効成分を生かしたブランド化推進と商品開発」（城陽市・亀岡市・舞鶴市）



▲精華キャンパスでの成果報告会

京都リサーチパーク主催「ふれデミックカフェ」

京都リサーチパークが主催するサイエンスカフェ“ふれデミックカフェ”に企画協力を行い、府大 ACTR の成果発信を行っています。



< Vol.6 > 「異種ゲノムの良いとこ取りによる果樹の育種」(8/23)
森本 拓也〔講師 生命環境科学研究科〕



< Vol.7 > 「地味にすごい！土の中のフィン・ミネラルたち」(2/27)
中尾 淳〔准教授 生命環境科学研究科〕

京都府内自治体の大学連携担当者との意見交換会（9/13）

京都府内の自治体の大学連携担当者を対象にした意見交換会にて、府大 ACTR の成果報告を行いました。

- ① 「城陽市特産物の文化的・文学的・国際的イメージの調査とそれを活用したプロモーションについての研究」
山口 美知代〔教授 文学部〕
- ② 「全世代・全員活躍型『生涯活躍のまち』(CCAC) 構想に基づく自治会活性化の実現に向けた「自治会活性化ビジョン」を活用した自治会の分析・調査及び ICT 化を含む実施施策の検討」
岩崎 雅史〔准教授 生命環境科学研究科〕

センターでは意見交換会の他、府大 ACTR に採択された提案者（自治体等）を対象としたアンケート調査を行い、事業の改善を行っています。



▲オンライン意見交換会の様子

4. 人材育成

▶まちづくり人材育成プログラム



「場づくり Labo (まちづくり人材育成プログラム)」は、各地に出向いて、地域づくりのキーパーソンとの対話やフィールドワークを通じて地域づくりを問い直すプログラムです。

2023年度は、京都府北部にある与謝野町をフィールドに、開催しました。

与謝野町を含む丹後地方は、古くから織物の里として、絹織物「丹後ちりめん」の生産地として隆盛を極めるとともに、物流の拠点としても栄えてきました。

また、四季折々の植生が豊かな大江山連峰や、天橋立の内海である阿蘇海、サケが遡上する清流 野田川といった自然に恵まれた地域で、今回のフィールドワーク先である大江山から加悦谷平野一帯は田園地帯が広がる米どころです。近年では、ビールの原材料となるホップ栽培もおこなわれ、農作物の生産も盛んです。

農と食の価値を活かした地域づくりをテーマに、与謝野町らしい風土、地質、地形を生かした米や野菜づくり、食を通じた内外とのつながりと地域づくりの関係性について、地元の農家、料理人、ローカルベンチャーのキーパーソンから話を聞き、ワークショップ形式で話し合いを行いました。

日程：①事前学習（オンライン）

9月30日（土）10時～12時

②フィールドワーク

10月7日（土）～10月8日（日）

対象：自治体職員、NPOや民間団体等の職員、地域づくりに取り組む実践者、支援者、学生等

参加者人数：1日目：14名 2日目：9名

（自治体職員、地域づくり支援者、地域金融機関、大学教員、大学院生など）

プログラム内容：フィールドワーク、参加者同士のグループワーク、地域キーパーソンとのトーク

● 訪問先：【温江地区】

まさ農園・かや山の家

● 【下山田地区】

● (株) ローカルフラッグ

● (Public House TANGOYA) / 与謝野駅周辺

● メンター：森本 健次さん [株式会社南山城 代表取締役]

● 運営：【全体モデレーター】

● 川勝 健志 [2023年度 KIRP センター長]

● 【モデレーター】

● 上杉 和央 [准教授 文学部・KIRP 統括マネージャー] /

● 鈴木 暁子 [KIRP コーディネーター]



地域キーパーソン

江種 里榮子さん (e.g. u. 代表)

オンラインでしたが、まちづくりに対する思考について話をすることができ、参加者のみなさんと「思考の出会い」があり、楽しかったです。次回は、対面でゆっくりと語り合ひましょう。

濱田 祐太さん ((株) ローカルフラッグ)

日々の会社経営で後回しになってしまう自社の理念や価値について考える機会になりました。

青木 博さん・梅田 優希さん ((株) かや山の家運営委員会)

かや山の家を引継いだ経緯、料理に込めた思い、人とのつながりとイベント企画、温江地区や丹後地域への愛着など、日頃、あまり言語化することがなかった自分自身が大切にしていることを再認識することができました。

木村正典さん・有紀子さん (まさ農園)

最初は、まさ農園の活動は地域づくりなのかどうか分からず何をお話してよいのか分からなかったのですが、棚田で米や野菜をつくって売ることが人とつながり、地域づくりにつながっていくのだと分かりました。

あれから、訪問してくださる方々に対して、温江地区の地質（蛇紋岩や水質）や地形（日照）がお米や野菜、お酒のおいしさにつながっているのですよと語れるようになりました。



▲左から：
濱田 祐太さん ((株) ローカルフラッグ)
山添 藤真さん (与謝野町長)
森本 健次さん [プログラムのメンター 道の駅みなみやましろ]
川勝 健志 (2023 年度 KIRP センター長)



▲まさ農園

参加者のコメント (印象に残ったこと・学びや気づき)

- 短い時間の中で様々な方々と対話できたこと。
- 様々な立場の地域のプレイヤーの方のお話がお伺いできたこと
- 一番は仲間づくりで繋いで頂いたこと。それぞれの役割の中で視点や立ち位置は違えども目標が同じであると共感できた。
- 今回聞いた話などを今までの経験や知識などと結びつけながら、自分の中で体系化できたこと。
- 小さな一歩を踏み出すかが大切だと学びました。
- シビックプライドの涵養が地域振興の鍵の一つであることが理解できた。
- 「まちづくり」はボランティアでは続かない。 日常の実践の積み重ねが幸せそうで楽しそうであれば、地域であれ、組織であれ、自然と人が引き寄せられるということ。 だからこそ、仕組みやコンセプト作りがとても大事。(例えば、ローカルフラッグのビールが売れると、地域貢献に問題解決にもなり、地域が潤う。結果として自然とまちづくりになる。)
- 民間のキーパーソンがまちづくり施策のパートナーであることに気づいたこと。



▲かや山の家

▶市町村からの研修生受け入れ

市町村研修生の受け入れ（精華町）

KIRP では、2016 年度より原則 2 年間、自治体の若手・中堅職員を研修生として受け入れています。今年度は京田辺市職員と精華町職員からそれぞれ 1 名ずつ、合計 2 名を受け入れています。

研修生は派遣期間中に、各自が設定したテーマに沿って調査研究活動を行うほか、KIRP の日々の各種事業にも関わり、多様な主体との連携・協働を行うための人的ネットワーク構築や対話のためのファシリテーション実践、派遣元自治体と本学をつなぐ調整・コーディネートを行っています。大学というフィールドで、自身の見聞を広げるだけでなく、外部のパートナーとの協働やプロジェクト運営を通じて自治体職員としての立ち位置やマインドを問い直す機会ともなっています。

【主な業務】

- ・調査研究業務
- ・大学・大学院講義、研究会への参加
- ・ワークショップや聞き取り調査への同行等
- ・海外研修への参加
- ・府大 ACTR に関わる事務局業務



▲住民の方へのヒアリング（愛媛県松野町）



▲フィールドワーク（愛媛県宇和島市）



▲森林組合の方へのヒアリング（京都府綾部市）



▲場づくり Labo（与謝野町）でのグループワーク

研修生コメント「大いに学び、悩み、楽しんだ2年間」

前川 由衣 (精華町)

センターでの日々を振り返ると、何もかもが役場とは違っており、そのことが、苦しく、悩ましく、だけど、何より楽しくもあった2年間でした。

センターでは、市町村職員の人材育成に重きを置き、「研修生」として受け入れて下さっていることから、自ら考え行動していくということが強く求められ、何事においても自らで判断する裁量がとても大きいと感じました。また、業務との調整が出来ている限りは、大学の授業を聴講したり、ゼミに参加させてもらったり、フィールドワークに同行させていただいたりということも可能であり、学生さんと一緒に課題に取り組んだり、中山間地域でまちづくりに取り組む人にインタビューをしたり等々、役場では経験出来ないことを沢山させていただきました。

1年目は、慣れない環境に四苦八苦しつつ、仕事と勉強、そして先生方やセンターの皆さんとのマニアックなお喋りを全力で楽しんでいたため、毎日、時間を忘れるほどでした。

2年目は、1年目で学んだことを活かして、精華町での課題解決のために、自らテーマを決めて調査研究をするということに取り組みました。研究テーマを決め、先行研究をサーベイし、計画を立てた上で、調査に取り組むのですが、「1歩進んで5歩下がる」という位、計画通りには進まない日々で、皆さんから、「去年は毎日イキイキしていたのに、今は浪人生みたいに暗いよ」等とご心配させてしまう程、悶々としていました(笑)。そんな中、最後まで根気強く研究指導をしてくださった川勝先生をはじめ、皆さんが温かく見守り導いて下さったおかげで最後まで研究をやり抜くことができました。

この2年間を通じて学んだことは、能力とか技術とか、そんな小手先のことでなく、諦めずにやり抜くことや、失敗を恐れずチャレンジすること、寛容になること、自分が沢山のの人に支えていただいていると気づくこと等、「人としての成長」だったのではないかと思います。

センターへの出勤初日に上杉先生がクレープを食べながらセンターにやって来たり、数学の研究者である岩崎先生との初対面で2時間も京丹後の海の話の話を聞いたり、ぶっとんだ(?) 方々に出会い、「ここでは役場の常識を忘れよう…」と思った時から、あっという間の2年間であり、感謝してもし切れないくらい沢山のことを学ばせていただいた豊かな2年間でした。皆様、本当にありがとうございました。

(2024年4月からは精華町 総務部 自治振興課)



▲川勝センター長からの修了証授与



▶ 国際交流協定

ポートランド州立大学 公共サービス実践センターとの知的ネットワークの構築

KIRP では、全米一住みたい街として知られる米国 オレゴン州にあるポートランド州立大学公共サービス研究・実践センター（CPS）と、2019 年度に国際交流協定を締結し、相互交流を進め、知的ネットワークの構築を進めています。

2023 年度には、CPS が主催する「まちづくり人材育成プログラム（Experience Portland While in Japan : Japanese Local Governance and Management Training Program）」が 20 周年を迎えました。9 月に、川勝センター長がポートランドを訪問した際に、CPS のメンバーに記念品を贈呈し、今後の国際交流協定の具体化について意見交換を行いました。



左：川勝 健志 [2023 年度 KIRP センター長]
中央：西芝 雅美さん [CPS 副所長 / ポートランド州立大学ハットフィールド大学院行政学部学部長]
右：飯迫 八千代さん [CPS 国際プログラムディレクター]



5. 組織体制

▶ 京都地域未来創造センター概要

組織体制

肩書	名前	所属	
センター長	(2023年度)	川勝 健志	公共政策学部
	(2024年度)	岩崎 雅史	生命環境科学研究科
副センター長	(2023年度)	宮藤 久士	生命環境科学研究科
	(2024年度)	上杉 和央	文学部
統括マネージャー	(2023年度)	上杉 和央	文学部
データサイエンスアドバイザー	(2023年度)	岩崎 雅史	生命環境科学研究科
企画調整マネージャー	(2023年度)	駒寄 忠大	公共政策学部
	(2024年度)	岩松 義秀	公共政策学部
コーディネーター		鈴木 暁子	
市町村研修生	(2023年度)	前川 由衣	精華町派遣
	(2024年度)	中村 真莉子	
市町村研修生		原田 成至	京田辺市派遣
コミュニケーションデザイナー	(2023年度)	永田 恵理子	
事務補助職員	(2024年度)	村上 央子	

連携推進員（学部・研究科から選出）

年度	名前	所属
(2023～2024年度)	市村 太郎	文学部
(2023年度) (2024年度)	玉井 亮子	公共政策学部
	桂 明宏	
(2023～2024年度)	亀井 康富	生命環境科学研究科
(2023～2024年度)	岡 真優子	生命環境科学研究科

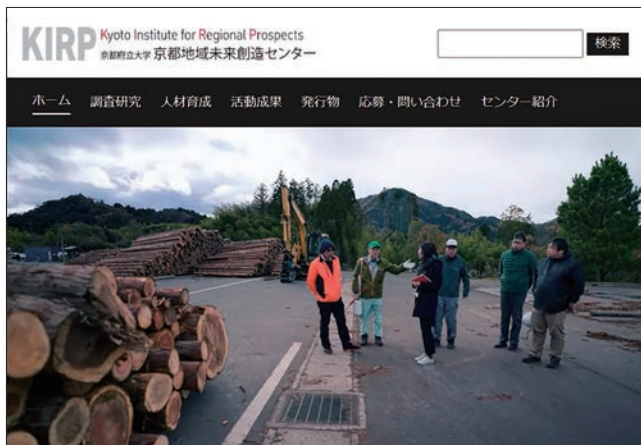
企画・地域連携課

肩書	名前	
課長	(2023年度)	鍋岡 崇
	(2024年度)	吉田 孝
主幹兼係長	(2023年度)	溝前 元嗣
課長補佐兼係長	(2024年度)	本郷 朋子
副主査		岡内 睦美
主事	(2023年度)	高橋 幸太郎
	(2024年度)	松尾 裕樹

KIRP 公式ウェブサイト

調査研究の進捗や成果報告、イベント情報などに関する情報に加え、過去の調査研究の検索機能等もあり、便利なツールとしてお使いいただけます。

サイトへのアクセスはこちら▼



SNS 公式アカウント

各種 SNS にて公式アカウントを運営しています。



ニュースレター

創設時より発行を続けている広報誌。調査研究の進捗や、イベント情報などを掲載しています。

バックナンバーはこちら▼



動画による情報発信

ACTR の成果に関する内容や、場づくり Labo のようなイベントの様子を動画にまとめて発信しています。

公式 Youtubeはこちら▼



